

力量の強さを骨の體までたたきこむ。階級斗争からのは落子=戦旗黨を全般敵から、ことごとく追放せよ／日本階級斗争の命運を語して、階級の分解と権力闘争に向けた階級の評議が進行する時代にあって、権力をたたく事だけそその属性が証明された時代はすでに過去のものとなっている。

大衆の暴力戦略の広延な形成をかちりつづり、権力斗争に向けた党派再編の課題に、全てをあげて見えさせてゆかなければならぬ。共産同に結集する全ての戦旗諸君！市民社会の深部にくすぶり続ける大衆の戦斗的エネルギーと新たなないへの地鳴りは、いま、我が同盟が階級戦線の最前線に躍り出る事を、促し続いている！

Ⅲ 大衆政治同盟の建設と統一戦線の形成をかちとれ！

すでに述べたように、現在、党派延命のための野合によってデッキ上げられた「神共」は内部からの分離を深め、また中核派も、どちらが先に民間に屈服するかをめぐって革マル派との無内容内ゲバをくりかえし、それらは、大衆運動基盤をさます荒廻させていく。いま我々に問われているのは、大衆の暴力戦略を広延に引き出し、それを階級へ形成してゆく斗いをあらゆる領域におしえげてゆく事であり、無防備のまま、権力の攻撃と、日共一民青の反革命格調の下にさらされていける大衆に対し、権力闘争への大道を実践的にさし示す事である。そして、その事をしなじでゆくための一戦旗戦術の行使が、こうした局面の中であって、わが同盟に要請されている。我々はこの間、単なる政治ストラテ

ジの一致によるプラグマチックな野合を一貫して拒否してきた。その都の正しさは、八派連合の解体から沖共のガタツキに至る野合格調の無さが如實に示している。今こそ、第二次新左翼運動の解体と、その人民戦線左派への転落に終止符を打ち、全ゆる領域において、大衆の暴力を大胆に引き出し、それに依頼するところの伝統的な暴力戦略の形態を獲得しなければならない。現実に生じる大衆の暴力戦乱こそ、我々の基本的な発見であり、この事を抜きにした、單なる政策協定にもとづく党派間の野合は、何の意味もない事を確認なければならない。

そして、こうして強固な暴力戦略の形成をなしてゆくには、統一戦線を總体として領導し、牽引してゆく、共産主義者同盟の建設をかちる事が急務である。

全ての同志諸君！一刻も早く共産主義者同盟の再建を全世界の戦士たちに告げさせよ！

5月15日の「返還」を前にして、沖縄においては、「界効勞」と「沖教組」が1ドル対3.60円レートによる通貨の即期切り替えと、同レートにもとづく貿易保証を要求して、7日から統一ストを実入し、また全軍労も、不理解撤回をかけ10日間におよぶ長渴ストに突入する。佐藤が自画自賛した「世界の偉業」なるものは、すでに労働者人民の力強いいいの前進の前に失墜し、戦後世界の崩壊と反革命同盟の再編の影響をまともにあびている沖縄人は、すでにいかなる「復讐幻想」をも拒否せざるをえない。そしてそれは同時に、沖縄人民の斗いを、インドシナ革命と日本人民の暴力はまさに、即ち、アジアの革命のうちに決定的位置をもつたものとなっている。沖縄人民の斗いと呼応する本土人民の暴力斗争の爆発を全力量をあげて準備してゆかなければならぬ。

すでに戦闘の聲は打ち鳴らされている！

「左」派のレッテルを投げつけあい、その分離と、内部対立を深めている。これらの事実は一体何を意味するのか？ この事こそ、彼らの、現実の大衆暴力闘争からの召喚と逃亡の結果を示すものにはかならない。彼らの大衆暴力闘争から逃亡と、党派軍団によるところの権力への一人よりの「攻奪」は、不可避的に敗退を余儀なくされ、その事が、彼ら内部における、暴力闘争の回復と、組織存立と見主義をもたらしている。そして、これに対する「左」からの反対は、軍事空論主義の傾斜を深め、こうして彼らは、ますます内部分裂を深めつつ、腐敗、堕落の坂をとめどなく、こうもろげてゆくのだ。

こうした、彼らの内的な腐敗と堕落は、当然の事ながら、彼らの野合によってデッキ上げされた「沖共」の分裂と總体としての済落を準備していく事になる。こうした階級戦線の目をおおはせりの旅は、いま、彼ら自身が、党一同盟、あるいは、党一軍一統一戦線の組織性格を、その根柢から、問い返しているのだ。我ら同盟がこの間一貫して提起してきた、大衆暴力闘争に根ざす、ここから出発する事、現実に生じる大衆の暴力叛乱こそが、大衆政治同盟の成立が可能にする根柢であり、大衆暴力闘争こそが政治同盟の組織性格を決定するのだというう、これら的事情を忽略させた一切の「組織論」と名づけられた航空事はいに美評囲句で語りたてようとも、口先だけの革命的言辞を弄すうとも、ことごとく、無である事、これらの主張の正しさがますます明らかになっている。

そして、こうした諸党派の後退と、テロ、内ゲバといふ暴力の腐敗と堕落は同時に、大衆運動基盤の荒廻をもたらし、大衆の戦斗的エネルギーを封殺し、権力への敗北感をいたずらに増大させ、反革命日共一民青の痴呆的議会主義路線の下へ、あるいは無気力の例へとおしゃっている。こうした大衆暴力闘争からのお逃亡と大衆運動基盤の荒廻をもたらした

諸党派の存在は、いまや、藩級闘争の前進にとって無益であるばかりでなく、明確にその敵対物に転化している。これららの部分を打ちくだき、我が同盟のヘグモニーの下に再編してゆく作業を抜きにして、革命の70年代をわがものとする事は出来ない。こうした部分の最も悪しき典型として表われた、革命の未来学派=戦旗派との党派斗争と、その階級戦線からの逃走は、現在、わが同盟の大任務として現在するのだという事を全ての同志は固く、自らの胸に銘記せよ！

とりわけ、明治大学においては、昨年の学費値上げ阻止学生大会において、庄重的に行はれた、わが同盟の巨大な前進と、その大衆的影響の拡大に恐怖した戦旗派は、戦斗的大衆に対する、テロ、暗殺、恐怖政治を行い、自らの「热点」の暴力的権柄に狂奔つつ、全明の学友の前に、わが同盟が、大衆の暴力戦線の形成をもって登場することに対して、優少な対応を行なってきた事実を我々は忘れてはならない。いまやわが同盟の全面的な登場と、過激な政治指導は、全ての心ある戦斗的学生たちから待ち望まれており、これに答えてゆくためにも、我々は、戦旗派を、和泉から、神田から、そして全部から遠慮し抜いてゆかなければならぬといし、戦旗派のテルミニール体制から、大衆の戦斗的エネルギーを暴力叛乱の狂乱凶暴の渦の中に解き放つてゆかねばならないのだ。学生大衆が再びキャンパスに登場する4ヶ月期における戦旗派との全面的な攻防戦に向て、全力を尽して、戦斗体制を準備せよ！彼らの陰惨なフロリズムによって流された貴重な血と多大な犠牲を決して無駄にしてはならない。血の報復をもつて、死者を死者たらしめよ！我々の藩級的鉄錆をもって、戦旗派を絶滅せよ！彼らの末期の水を用意せよ！我々に対して『軍事反対』などという無内容なリッテル貼りを行なった、空論主義者共に、我々がこの間の権力との烈火の攻防戦の中で打ち鍛えてきた暴力一軍事

価値意識の解体の中から生まれた。個別の決意に基く暴力的直接的な大衆の叛乱的もあつた。ベトナム反戦斗争、基地斗争、70年安保斗争等の政治的斗いや、学園斗争に参加した大衆の共通の性格であり、いまやそれは、労働者、学生、地政住民等の全ゆる所で生じし、戦斗性を持つ運動の共通性でもある。だがこれのないはしたか世界性、時代をも有する大衆的決起でありながら、先進資本主義国との斗いは、わが國に於ける斗いと同様、ほとんどが、國家権力の陣営のうちに敗北と余儀なくされた。

しかもこの斗いは、大衆の戦斗が、その持つ全力量を発揮した上、力量の差によって破れたというでは決してない。大衆の斗いのエネルギーは分散のまま、個別、局地的に爆発しつづけているのである。我々にとって問題のは、戦後民主主義の土俵上の対決とは異なる対立構造を大衆的に作り上げ、大衆集団の全般的な活動化し、大衆的分別的暴力と革命の暴力と引き上げる事を我々の基本的任务である。

69年10月11日沖縄に於ける敗北は、單に、軍事的敗北といふ事ではない。日本帝国主義ブルジョアジーからする、先行性的な階級戦線と反革命的社會構団は、人間自身によつて、人民の斗いが敗北されるという構造を作ってしまったのである。そうであるならば、我々革命の立場に立つのは、そうした権力から階級形成、社会形成の先行性を、労働者階級形成、革命的階級形成の裡に解体せねばならない事、產生点……地域社会・学園等、不斷に生じる、アーネスト大衆暴力を、「革命の暴力」へと階級形成して行く事である。現代社会において、帝國主義の全ゆる再編と、帝國主義の反革命政策は、必然的に大衆をも呼び起すのだ。問題なのは、それらが「戦後民主主義の政治構造」(戦後においては文部省階級それ自身の思想的立脚点)への約束を阻止する事であり、議会内取り引きの

偽謬を超、新たな革命的政治のうずの中へ大衆とその暴力を最大限引き出す事である。共産主義者同盟の斗いは、67年以降一貫して、かかる大衆暴力の最前衛として機能してきた。大衆闘争の自然成長とその限界は前提として語られなければならない。60年代の斗いに於いては、その自然成長性は個人的決意にもとづく斗いとして現われたために、その限界性もまた当然であった。大衆暴力斗争は、今だ、分散的、局地的であるとは言え、我々は、大衆の斗いを旌旗し、党派軍団と、全てを凌ぐる事を拒否してきた。69年10月11日沖縄の敗北以降、混迷する諸党派のカンパニアル格闘と、党派軍団との傾斜、グリラ主義、テロリズムへの傾向による自己保守的、セクターにのみ主義に反対し、大衆暴力ととしての階級判断として現れて來た我々は、その表現こそ、昨年6月沖縄斗争であり、形骸化した、全国全戦の中央集会に集結する大衆自身に、暴力斗争の確執たる地平をつきつけてきたのである。70年沖縄の「國政参加」を下地として、沖縄反戻の路線を国民的にイデオロギー化しつつ、國会に於ける「強行採決」というように、「革新勢力」と呼ばれる部分をもまさこむ形で貫徹された侵略略綱が具体的に進行する中で、沖縄のゴミ暴動を始めとして、三里塙斗争、そして各地の住民斗争と、全國津々浦々の大衆叛乱は、全国全戦や沖縄の混迷とは並行關係に陥りてきており、5月段階において、それらの大衆叛乱と結合する復讐の斗いは、暴力斗争をもつてする以外ありえず。我々は組織を踏して斗い抜いたのである。

我々は67年以降の闘争の総括を経る中から、戦後階級斗争、そして新左翼革命運動の自己止揚そのものが問われる事を確認し、軍事の技術主義的総括や、党を大衆の自然発生性の延長の中に解消すると言った事で総括策を見い出そうとする事を一貫して批判してきた。また、どのような長いをまとったもの

<6・15> 評判闘争 冒頭陳述

6・15闘争戦士 八千草 次郎

昨年6月沖縄斗争を新左翼戦線の最先頭で戦い抜いた事を、ほこりを持て確認するとともに、この手の日本階級斗争に於ける歴史的、社会的意義を明らかにしていくたい。

60年安保斗争における第一次共産主義者同盟を、我々の思想的、実践的の発見としておく時、60年安保斗争は、議会内政治を街頭斗争として実現化する斗いとしては、一定程度前進しつつも、自立した政治過程という政治の枠組みを、戦後市社会の解体を通して突破する革命的な政治そのものの形成には至らなかったと言える。すなはち60年安保斗争に至る戦後日本の階級斗争は、多くの人間の矛盾の発現の底盤を、ブルジョア政治過程として議会内へ攻撃し、権力から公認された左翼政党へと問題が蔓生された。「戦後民主主義」の中に全く包まれてきた。60年安保斗争が完全な主流派の戦斗を中止して見せた実力闘争の地平は、しかしながら、戦後市民の価値意識に立脚し、現実的には市民主義左派の位置をもつたものとして、敗北を余儀なくされたのである。

日本敗戦斗争の新たな進展と飛躍が要求されたのは、世界的階級斗争の進展、などよりも、ベトナム革命戦争を中心とした、インドシナ、アジア人民の武装決起であり、米帝主義を中心とする反革命同盟に対する、世界プロレタリア人民の決起である。67年10月8日、佐藤勢トナム因辺斗争をあらゆる意味で駆逐した新左翼の登場こそ、日本階級斗争にとって新たな局面を呈するに至った。第一それは、国際的な革命斗争を連帯し、た斗いであった。ベトナム反革命戦争として斗

われたその質は、その名称の中に、戦後の平和主義の名乗りを見せてはいたが、それが、戦争一般や、あるいは「帝國主義の戦争政策」への反対にとどまらず、ベトナム革命勢力の支持、連帯を意識してゆくことが、闊いの発展の力となっていた。この斗いを通じて世界革命斗争の現実的定義に由来する自らの斗いを実現的に蘇らせるに至った。第二に、60年代後半の大衆的な斗いは、戦後民主主義支配体制の中に、その手のエネルギーを組み込む事が、始めから不可能な発展過程を示した。ブルジョア民主主義政治過程とは対照的別闘過程をたどって盛りあがった新たな大衆の暴力的斗争は、戦後支那秩序の底辺にならず、社会的潜伏構成の動搖を基礎として成立した。

この大衆の斗いは、議会の支配秩序の基礎のゆるみを土台にしつつ、それをつぶし、その仮面を大衆的にはぐかいであった。67年羽田牛久以来の藩級斗争の以上の昇華は、戦後世界秩序への世界的な階級斗争として同一の地平であったのである。それ故に、この斗いは既成政党、既成革新指導部の下では、決して叶ひえないものであったのである。これらの斗いは、この大衆暴力に根ざし、新たな大衆的前衛による突出的斗いを媒介として始めて全面化したのである。これらの手に見られた限界もまた、この手の新たな特質と表裏のものであった。階級の共同性を主眼の基盤におき、あるいは、戦後の共通の価値意識にもとづく、それ以前の斗いは、その持つ一定の戦斗性の根柢を失うとともに、戦後の大衆運動の時代は終った。開始されたのは、そのような戦後の階層的共同性の解体、戦後

争するには三里塚一そして多くの住民斗争の質を解明する基本的視座を明らかにしておかなければならぬ。

三里塚空港闘争は、日本階級斗争の中で、60年安保-65年日韓戦争-67年10月羽田空港-69年秋期決戦と打ちついだ10年間の階級斗争から様々なものを学びながら、新たな局面を呈するに至った。当初の「土地を守れ」の斗争は、既に私的な領地化を超え、権力との壊滅的競争がむけいの累積化は市民社会における人間関係全体の変革を求めるに至っており、旧来の「農村共同体」を守るというのではなく、むしろ自らそれが解体し、斗争の中で、新たに斗争の共同性を形成し、大衆的な暴力を通じ、付近の住民とともに、階級として形成されんとしているのだ。現在の多くの諸党派が語っているような、軍事空港規定で反対戦争へ結集させようとする発想は、三里塚斗争の世界性を、多少なり形而外べいでいる。それは「土地防衛」の私的領地から日本帝国主義の侵略反対の道、その一環としての三里塚空港奪回争までお上げなどという、いまだ、個別斗争=全人民の政治斗争へという、60年代政治構造に依拠してはいる。「東京新聞」の記事は、帝國主義社会再編としての首都機能廻転による社会地域再編として進行している。そして様々な社会領域におけるアプローチの侵略反革命に向かう帝國主義の再編のドラマティックな進行と同時に、それらが、「国益・私益」をイデオロギーの基盤としたところの、「国家事業」の名の下に行われる争いに対し、国家の共向幻想に根柢から対決する暴力的反対戦争として、三里塚の斗争は、位置しているのだ。三里塚の農民の争いに対しては、「国益・国防」のイデオロギーを、「國家的事業」の名の下に掲げた党派は隣接は、しかしながら、一方においては、69年秋の「自容辯」に見られるように、戦後の市民的禮儀に対する大衆の保守意識に根ざした「私の利

害の防衛」に依拠しつつ、革命派の斗争に対する対抗軸を提出している。このような支配者階級の二面的な対応は、彼らが今なお、全国民的統合基盤を提出しきれていない事の表現であり、それ故にこそ、「強制執行」一「特措法」の発動と、関東地区機動隊を総動員した支配者階級の強迫性は、現在の階級分解の進展に対しての「君の権威」=政治国家の介入をしており、その事が、階級の不可避の対決を生み出す時代へと突入した事を意味するだろう。5年有余にわたる三里塚斗争は、まさに、こうした階級闘争の中で、反対同盟を中心とした、個別利益の暴力闘争としての徹底化、個別国家権力との不断的暴力的対決を不可避とし、その両端を通して形成されてきたのである。このように形成され、そして今なお引きかかっているその質こそ、70年代権力斗争の基盤として斗われるものであった。現在、「土地の代執行がどれだけ終った」とか「黒旗があといくつあるか」という論では論じてある。その質は、今まで民運運動としてきつづけられ、70年代の住民斗争の新たな質を得ていている。現代社会に於いて、地域及び地域住民に対する権力分配の再編は、「首都機能整備」「新企画開拓会議」との機構によって展開されている。60年代における農村の解体、都市及び周辺における工業立地、行政機構の激急な膨張が、この開拓の背後にあたる事実である。さらには根本では、60年代における権力再編が、農村共同体、および都市の地域的・市民的共同性の解体を行なせ、支配の組織的・イデオロギーの既存の機能を弱化させている事実である。これは他面で管轄構内部の労働者を「住民管理」の担い手へと勤務するものとなっている。自治体における「革新政権の勝利」は、以上の過程を補完する役割を果している。それは「革新」のイデオロギー故に、国家権力に出てても、一層率直的、スマーズに、この再編を進行させているのである。

であり、主導主義的な、末永への「あこがれ」をはじめに我が事によって次第から起きた反された正義意識を反対し、別途する社会復興一大衆努力こそ、我々の最高意識である所的視点であり、既成の混亂からやがて社会活動正しいマルクス主義辨証によると、ヨーロッパ大陸といった、革共連主義とその延長が横行する中で、それらが並に、紅旗防衛と同心円の壮大路線でしかない事を確認し、反対してきた。67年以來の大衆斗争が示した権力との、暴力をもってする決戦は「政治国家一市民社会」という二元論的理縛に基づく政治を中心とした、個別利益の暴力闘争としての徹底化、個別国家権力との不断的暴力的対決を不可避とし、その両端を通して形成されてきたのである。現在の市民社会の「あつれき」から発生する大衆の連携を効果的に組織しうるものではない事は明らかである。我々がこの暴力斗争の最も世界性を語るのは、形態的・世界的に起つてゐる暴力風潮に似ているというよりもではない。それは、現代世界統体の革新から日本帝国主義の侵略反対の道、その一環としての三里塚空港奪回争までお上げなどといふ、いまだ、個別斗争=全人民の政治斗争へといふ、60年代政治構造に依拠してはいる。「東京新聞」の記事は、帝國主義社会再編としての首都機能廻転による社会地域再編として進行している。そして様々な社会領域におけるアプローチの侵略反革命に向かう帝國主義の再編のドラマティックな進行と同時に、それらが、「国益・私益」をイデオロギーの基盤としたところの、「国家事業」の名の下に行われる争いに対し、国家の共向幻想に根柢から対決する暴力的反対戦争として、三里塚の斗争は、位置しているのだ。三里塚の農民の争いに対しては、「国益・国防」のイデオロギーを、「國家的事業」の名の下に掲げた党派は隣接は、しかしながら、一方においては、69年秋の「自容辯」に見られるように、戦後の市民的禮儀に対する大衆の保守意識に根ざした「私の利

大衆政治同盟建設の現段階

同志諸君！

今秋沖縄戦が紹介として議会主義的集約のものに終りを告げた現在、この斗争の先端をなした者たちへの集中した弾圧が開始されている。権力のこの弾圧は、テロと内ゲバという我々の側の暴力的繁殖によってもたらされられている。明らかに、大衆の革命的暴力の展開によって、現実は大きな脅威となっていている。それは単に今秋闘争の結論の問題につきるものではない。19年秋以降の「自容辯」に見られるように、戦後の市民的禮儀に対する大衆の保守意識に根ざした「私の利

害の防衛」はなお学園闘争から70年安保、沖縄戦にいたるまでの二つの後の明白な退潮期のうちにあつた。従って、この時期における斗争は一切の革命的空虚や場あたりの思いつき空虚を風化させていかずにはおかないとされるのは大衆暴力と政治に対する我々の先行行為なので。我々はここではこれまでの斗争が主として、現実は大きな脅威となつて、我々の組織階級がどのように現実とかかわってきかを点検しておきたい。この三点とは、

(1) 三里塚一沖縄戦の組織方針

(2) 三月三里塚、六月沖縄、九月三里塚、十月沖縄戦における軍事問題

(3) 開門問題、中国問題と国内階級分離、そして労働戦線における我々の本格的取組みの展開

大衆暴力 闘争の一貫性

我々はこの間一貫して、我々にとっての世界革命の現実性、即ち大衆と大衆の暴力闘争に進化してから出現する事を宣言してきた。この事は、我々にとって決して單に「暴力革命」や「大衆革命」の原則的確認や大衆斗争へのプログラミング的な作風を意味するのではない。まさに日々進行する現実の世界革命の事業全体と、我々は大衆暴力の問題を中軸にして把握するのである。この点が常に忘れられてはならない。大衆政治同盟が一方では58年以降の共産主義者同盟の歴史の最もラジカルな継承をめざす。他方では同時にことさらには大衆の政治同盟として、我々にとっての新

地域住民に対する以上のような権力再編の動向が、地域斗争を単に、個別的、改良運動などとめない根拠になっている。都市周辺農村あるいは、労働者住区における斗争の徹底した大衆化と暴力化は、旧来の地域の特有の共同性の延長ではなく、その積極的な解体と、新たな斗争共同体の形成の中で、可能となっている。この辺の徹底化は、権力再編のものでは、ストレートに中央権力機構へとぶつからざるをえないである。このような、住民斗争の新たな質が、直接的な大衆暴力として生起する斗争を、権力斗争へ形成する事が我々の任務であり、全世界の帝國主義反革命同盟と、その「後世世界」に対する大衆暴力との結合を獲得しつつ、我々が67年以來提起した「ヨーロッパ国際主義」との連携を強化していくを確固として推し進めてゆくであろう。

今まで語って来たように、昨年6月斗争の地平と質は、大衆に依拠し、大衆の暴力を牽引する基本的手段として、全国共斗を解体し、大衆暴力斗争の渦の中へ再編するすれば実質的な内閣をもって克明に取れたのである。我々は、6・15の斗争が昨年の夏、秋の斗争へと受けがれでてきたことを確信する事が出来る。帝國主義の権力再編=侵略反革命に対する日本民衆の抵抗、そして叛乱は號々くがり、我々は常にその最前線で甘い抜くだらう事を確信しておきたい。

終りに本裁判に対する我々の基本的視座を述べておかなければならない。

60年安保斗争の裁判において、被告側の陳述、つまり「過失犯侵入とか、威力素暴妨害といった現象のみが取り出され、起訴された。これは完全連続という強力な反対勢力に対する弾圧である。」という主旨の発言に対して裁判官は、「思想・言論の自由が認められている憲法のもとでは政治的思考や信条自体の是非を質す事が出来ない反面、どういふ政治思想の持主であろうと、その行為が

これらの点こそ、まさにこの一年の我々の斗争の中で一つ一つ具体的に検証されてきたことなのだ。6・15、10・19、おまじめとする首都における大衆暴力斗争、三里塚斗争、革新自治権に対する斗争、そして沖縄における斗争に別し、その時の「設定された決戦」として対応し、あるいは政治過程におけるスローガンの同質性によってまとめる、といった方針を我々は拒絶している。むしろ我々は第一次大衆の暴力の展開を通じてこれらの個々の争いがもつ同質性・連帯性を認め、第二にこの同質性を現実の世界革命の暴力戦線へ形成せしむる実現基盤、即ち帝國主義権力による暴力再編一階級全体の徹底化によつて帝國主義権力の剥奪と対決を全階級に告げ知らせること同時に、同志に對してこの徹底性と階級的波及性をまさに組織のあるいは運動的な全世界の結合と形成する任務を課するのだ。今日、「露運」の最高局面における沖縄セネストの中止半端なスローガン「返還交渉のやり直し」は、文字通り沖縄ブルータリートの苦悩を表現している。それ故このスローガンはゼネストにおける沖縄ブルータリートの暴動によって暴力を蒙つてからかれていかざるをえない、この事は、階級済体に抗する日本とアプロの暴力斗争の実態沖縄ブルータリートを位置させざるは無かない。逆にいえば世界における尖端的な階級斗争こそ、我々は大衆暴力との階級構成の誤解を現実的なものとして寸断に羽織につきついている。大衆政治同盟はこの点に政治同盟としての全面的な役割を要求されるのであり、それは「佐島を倒す為にどうする」といった課題に比べることのできない現実的かつ絶続的なものなのだ。

我々はこの一年の大衆的暴力闘争の闇の中で、70年代階級斗争がもつ以上の性格、即ち、たとえれば大衆暴力のもつ一つ一つの突

出性とその階級的結合の不可避性とを、たえず現実的矛盾としてひきうけてきた。それは個々の戦術や組織略綱の決定にいたるまで、我々に不断の緊張を強いるものである。そしてこの点での我々の確認は、この矛盾こそ大衆暴力に依拠する斗争の必然ちという事でありそれが、逆に、大衆暴力斗争のあらゆる原則主義とブルータリートの傾斜に対しても、大衆暴力斗争を、権力構造と階級解体に抗する現実の革命戦略の一貫性のうちに貫徹させることによって克服していくのだということである。

大衆政治同盟 と軍事

大衆政治同盟の組織性格の基礎を規定するものは現実の大衆暴力斗争である。そしてここにおける大衆の暴力は以上述べたたゞに単に同志の作風と戦術を決める基礎となるという意味をもつだけではない。それは同時に現実の同質的かつ階級的大衆暴力斗争のその根柢も、支配体制の構造そのものを我々に暴顯し、かくして世界革命の戦略をまさに現実的なものとしていくのである。それ故大衆政治同盟は、大衆暴力の革命性と、革命の暴力にとっての戦略的意識性の不可避性と階級済体に抗する日本とアプロの暴力斗争の実態沖縄ブルータリートを位置させざるは無かない。

以上の点は、三里塚、沖縄斗争の位置づけと方針のうちで我々が具体化してきた事に関しては一貫してつらぬかれている。我々にとつての現在の軍事課題については、同志諸君に一条論文(「情況」11月号)の参考をめねばならない。一条論文においても、我々は現実の大衆暴力斗争から出発し、これを大衆武装にまで組織化する我々の道すじが現在の日本における国家暴力の構造との不可

ななプロレタリアートの階級形成をめざす組織として確立されることも、この現実的な一貫性を離れてはありえない。

革マルの如く「論理の一貫性」が現実の運動にこの一貫性を強制し銅型にねる、という性格の組織もある。また他方で、同じ反スターリズムのはずの中継紙や、旧ソ連の革マル主義者たちはいま完全に「論理」の教条と現実の大衆暴動とを自らを分解させて、機能させている。一方には「暴力革命の原則」は原典のまま存在し、他方で別のところで現実の方針は不斷に現実の状況の場あたり的道筋を深めてゆく。この二つの分解を断ち、原則と戦術とを矛盾の弁証法の統一として深化させてゆく革マルの現実性を、我々は大衆暴力の戦闘の中に体現してゆくのだ。この点を離れならば、我々の大衆暴力略綱にとっても、自己分裂は不可避である。

たとえば現在、沖縄戦争の中で提起され一枚岩に唱えられている一つの「戦術」がある。「佐島内閣は今や機動隊によってのみ支えられている。だから、我々の暴力による機動隊のせん滅こそが佐島内閣を倒す」と、この戦術はいっている。現在の日本における権力済体の上での実現はさほどとしても、この戦術は単純かつ重大な二つの説明を答える事がなく前提にしている。「内閣を倒して何とする?」および「我々の大衆暴力は戦闘において後退派をせん滅しうる?」

機動隊に対する軍事的敗北は、10・8以降の一連の斗争の軍事的帰結として明白な事実である。そしてこの軍事的結果はこれら一連の斗争を鋭く集約する同時に、それ故に軍事の帰結をもたらさざるを得なかった我々の暴力の質に対するまさに全局的な詰縛を要求しているのだ。そして問題のこの全局性といふ観点からしてのみ、「結局暴動隊には勝てないのではないか」という危険な大衆の挫折感に答える事は、我々にとって避けて通る事のできない政治的基本問題を意味するのだ。

だが、我々が赤軍派との論争において主張しつづけてきたこの論点を、これで何周遡れかのランナーナー、しかも「軍事」を「政治」のネタに使っている者たちに今さらくりえしてやる必要はないだろう。我々は暴力の問題を原則問題に棚上げしないと同様軍事や、戦術の問題に巻き絡ませてはらえもしない。現実的な大衆の暴力を我々は60年代における帝国主義的権力再編と被爆市民社会の階層分離の進行という事実のうちに把握する。この点については、「宣言案」第二章「日帝と大衆暴力闘争」が全面的に参照されねばならない。現在の階級関係において大衆暴力をとらえる我々の立場は、一方では67年以降の「暴力と国際主義」の復興の現実的実施を鮮明にする同時に、他方で大衆暴力斗争の展開を、まさに戦後世界の権力再編に対する全面的の反撃と被爆市民社会の階層分離に対する全斗プロレタリアートの形成についての戦略的展望のもとにすえるのである。従って現実の大衆暴力斗争はなぞ分散性と個別性の形態のもとに展開されようとも、この斗争の創出と指揮とは場あたための個別運動主義や自然発生的な個別斗争主義よつては決して實現されないものとしてあるのだ。また、大衆の暴力斗争の組織者、大衆暴力の革命の暴力への形成者としての大衆政治同盟の組織性は、何よりも以上の点に現実的に規定されるのである。我々の「宣言」が第二章の分析を受け第三章(O「大衆暴力斗争と革命の暴力の形成」)へと展開されている理由はここに存在する。それ故にした我々は、こう言っていいる。「同盟は、大衆斗争の各領域への計画的な配慮と指導とをそこなわなければならぬ。またそのために、同盟は単なる技術と政策プログラム以上の革命と革命運動の全体像について、基礎的一致をもつものである。」

以上の点はまた從つて、逆に同盟の大衆暴力の世界性と全体性に関する「論理的、思想的」集団と化する傾向をも粉碎する。そして

会内抵制派としてしか機能しなくなっている現在、我々は独自の政治的結集として、労働者評議会の運動と組織化を推進してきた。職場における自らの力を大衆の暴力斗争として現実させ三里塚や学園における暴力斗争との同質性を獲得していく事は、第一義的に労働者自身の課題である。しかも、この課題にとって、今や既成革新とその組織の解体と反革命の中であ、広範な大衆的基礎が用意されつつあることを我々は確認するのである。そしてこのような各戦線における暴力の同質性と一体性の獲得にまで結合するという課題を、まさに大衆政治同盟に課すのだ。この一年の斗争において各戦線における大衆暴力の展開を同盟の組織的指導のもとに現実化一体化してゆく事を、我々は目さしててきた。二期にわたる沖縄斗争における農民労働者、学生の暴力を通した結合はこの第一歩である。そして現実、11月の沖縄斗争における野望のマッセトの展開と街頭進出とは、まさに社会空間とその現実的結合を可能にするものとしてこれからよしとしている。この斗争の實質こそは、我々の沖縄斗争の組織的獲得目標であり、それによって我々は大衆政治同盟の結成を具体的日程にのぼらせることができるだろう。

大衆政治同盟 の組織形態

日本における大衆的暴力斗争と大衆政治同盟の位置についての以上のような我々の経験を踏まえたうえで、我が同盟の組織階級について以下のとく簡単に提起する事ができる。(1)プロレタリアートの組織化は、既成組織の宿借りや「左傾化」によってははたしない。

被爆市民社会の物質的、イデオロギー的

体過程の中で、既成組織は、日本の戦闘の労働者に対する反革命暴力として機能している。さらにこの過程を通じて、既成の組織は「全労働者の唯一の組織」としての名実を失なっている。この事実は、大衆暴力の分散性と閉鎖性を止揚するものとされた從来のプロレタリアートの自己組織(その國體主義)が完全な危機に達している事を意味する。これらは単に大衆の革命的暴力を圧迫するのみならず、全国的に均質な階級意識で武装された個別的で自然発生的大衆暴力の展開はこの反映である。

(2)それでは「左派」は大衆暴力の分散性を克服しうるか。第三世界における革命軍は階級形成の觀點から見るに伝統的土地共同体に個々に土着した戦鬥組織の階級性を止揚するものとしてのプロレタリアートの形成を意味する。

ブルジョアの生産関係自体が生みだす土地共同体の解体と均質的資本労働者の形成とを戦斗組織の前提としえないために、他方ではこの革命軍としての政治・革マルの組織によって、斗う者の均質的な全国的結合を達成する。従つてその回路も、統一の軍事系統による機動隊の統合ではなく、戦士とそのコミュニティとの結合關係のうちにこそ革命的基礎を確保するものである。

先進資本主義国における先行的軍隊形成がなお革命的大衆との結合を断つれ、單なる軍事形態をしか意味しない根拠ここにある。それは革命の暴力の先端をになうという事によって、まさに逆に大衆の自然発生的暴力の展開を封じこめてしまうというジレンマに直面せざるをえない。

(3)新たなプロレタリアの階級組織は、大衆暴力の政治同盟として全戦線にわたる均質性を得るにはねばならない。

戦後社会の解体を表現するプロレタリアの大量放出と都市への集中という事実のうちで

遡の連闇のうちでとらえられている。そして組織的には、大衆政治同盟の武装は、一方では広範な大衆暴力を武装させ大衆武装行動隊を形成する事を意味し、他方ではこの武装行動隊の中核となるべく同盟メンバーを政治・軍事的に培训し、結集する事を意味するのだ。ここにおいても、大衆暴力版の戦闘と組織された軍事部隊の突出の行動とは、二つながら大衆政治同盟の任務となる。従つて我々の宣言はもとより主張している。「同盟は、大衆の暴力斗争の政治的成熟まで暴力を大衆武装へ拡大、深化させるものである。そのためには、階級斗争が要求するあらゆる機会と形態において実力斗争と武装斗争を準備し、この大衆化をはかる。」

6・15の大きな政治結集における我々の武装斗争、さるに三里塚第二次収容の決闘における大衆武装行動隊による機動隊のせん滅戦等々は、軍事における一切の主義主義に又「プロレタリアート」の階級としての存在を前提にしてきた事に対して、我々はこのようない前提を棄却する。大衆暴力を革命の暴力へ形成する我々の略綱は、いかにされば大衆暴力をプロレタリアートの階級的、組織的暴力へ形成する事を意味する。このように大衆暴力の展開を通して、斗争主体が旧来の共同性を破壊し、新たな斗争共同体を再構成する意識性こそ、大衆政治同盟の階級形成の意識性を意味する。

従つて、「学生」、「農民」、あるいは「労働者」であれ、それぞの斗争の範疇は、暴力に抗する大衆暴力の形において今や相互の基本的な同質性を獲得する事ができるのだ。この一年の斗争において我々は学生の斗争や組合の斗争等の個別の区分を拒否してきた。スローガンの一斉や街頭行動での一体化といふことでしか両者の同質性と結合をもはかるこの出来ないような斗争の質を克服するこれが我々の課題であった。多くの反戦青年委員会の労働者諸君が再び組合員にもどり、組

ローテ 第13号 (¥ 50円)

編集・発行= ローテ編集局

連絡先 = 044-92-2578
 (明大生田学館内 山田良雄 氏付)
 (仮)

大衆の革命的暴力は自然発生的にも、目的意認的にも不断に展開され、創出される。このプロレタリアの暴力は、その個別性の克服とともに、既成の「国民」(市民)階層による反革命的暴力との意識的対決をも不可避免的に要請されている。従って新たなプロレタリアートの自己組織は、大衆暴力自体の内部で同時に緊密な政治的一致を模倣から確立する以外はない。

大衆内部のプラグマチズムと党の内部の密教的意志一致という分離を打破せねばならない。

従って同盟の組織は、産別組織(支部)の連合ではなく、地区各に集約される組織の全国的結合となる。

(4) 基本的大衆の事業であるという原則は我々の組織の基本的前提である。

我々は革命を一つの完結組織の支配による権力奪取とは考えない。そのような試みは、大衆暴力の自然発生性内添の形式内、部分的ヒエラルキーをもたらすだけである。

大衆政治同盟の基本的任務は、大衆の暴力を広範にひきだし、これを革命の暴力に形成する大衆の事業を援けることにある。それ故同盟は何よりも運動体として、多様な大衆暴力の戦線との運動構造における結合をめざす。大衆的暴力斗争の成熟がこの組織体の形を決定する。

(5) 大衆の事業を援ける固い同志的結合を同盟はその中核にもたねばならない。

大衆暴力の自然発生的性格は我々にとって前提である。これに対する同盟の意識性の表現は、同盟中核における少數の當任幹部の形成によって確保される。この集団は現実の大衆運動体に限定、拘束される事のない當任オルク集団である。この中核の党的結合は、しかし(4)に述べた大衆暴力と同盟の結合関係とは異質の組織性格をもつ。我々が同盟の運動といふ場合、その内部における同盟員一大衆との結合関係は、このように二重の性格

を堅持しなければならない。

(6) 同盟の武装中核が別個の系列のもとに組織される。

すでに見るように、大衆の革命的暴力は「国民」内部の反革命暴力との分解対立の中でのみ形成される。それ故大衆暴力は寸断にこの反革命暴力に対する自衛武装を要求される。これは大衆武装自体の任務であるとともに、同盟はその内部に組織された武装部隊の系列を持たねばならない。だがもちろん、この部隊は大衆から切り離された「軍隊」の組織化ではなく、常時、大衆暴力の内部に、その個々の任務を持つものである。

(7) 以上のような同盟が從来「党」の名称のものに語られてきた幾多の任務をなすものではあるのは当然である。

同盟は大衆的暴力闘争の前衛、階級斗争の前衛であり、この意味で我々は十数年に及ぶブランドの革命的性格を最もラジカルに继承するというのである。ただ我々は、深い意味での党的性格を、以上の同盟とは全く別の組織原理をもつとの把握し、別個に組織するのである。一口に言って、我々は党を大衆運動と結合し、これを指導するものとは考えない。この結合は、ただ権力奪取の峰起の時点における結合によってしか、実証されえないものである。

(8) 以上の組織方針のもとに、この一年間の学生組織、労働者組織の斗いが活性化されなければならない。

この総括によって同盟内各組織の相互の均質化が追求され、運動体としての同盟の形成が追求される。同時に、同盟中核としてのスマップ集団(地区委員会常任集団)の確立がからとられ、運動体へのオルク集団の体制が明確にされ、党派活動の骨格が形成されねばならない。

この両様の体制が、我々に共産主義者同盟の革命的再建を実現的に可能にする道である

1971年12月